

守 囊

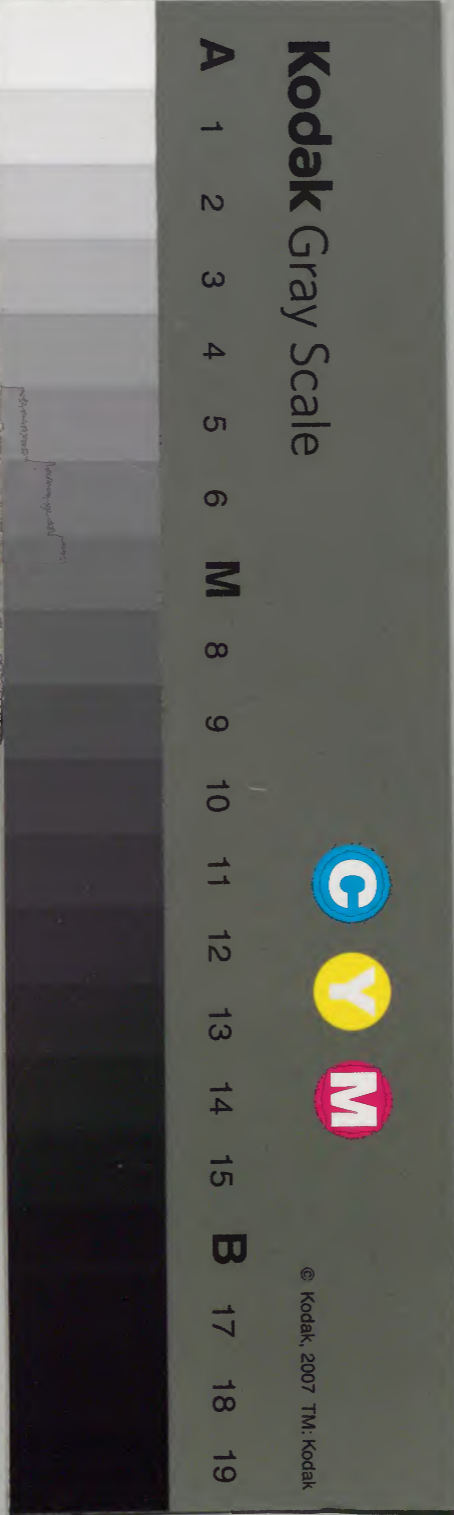
下

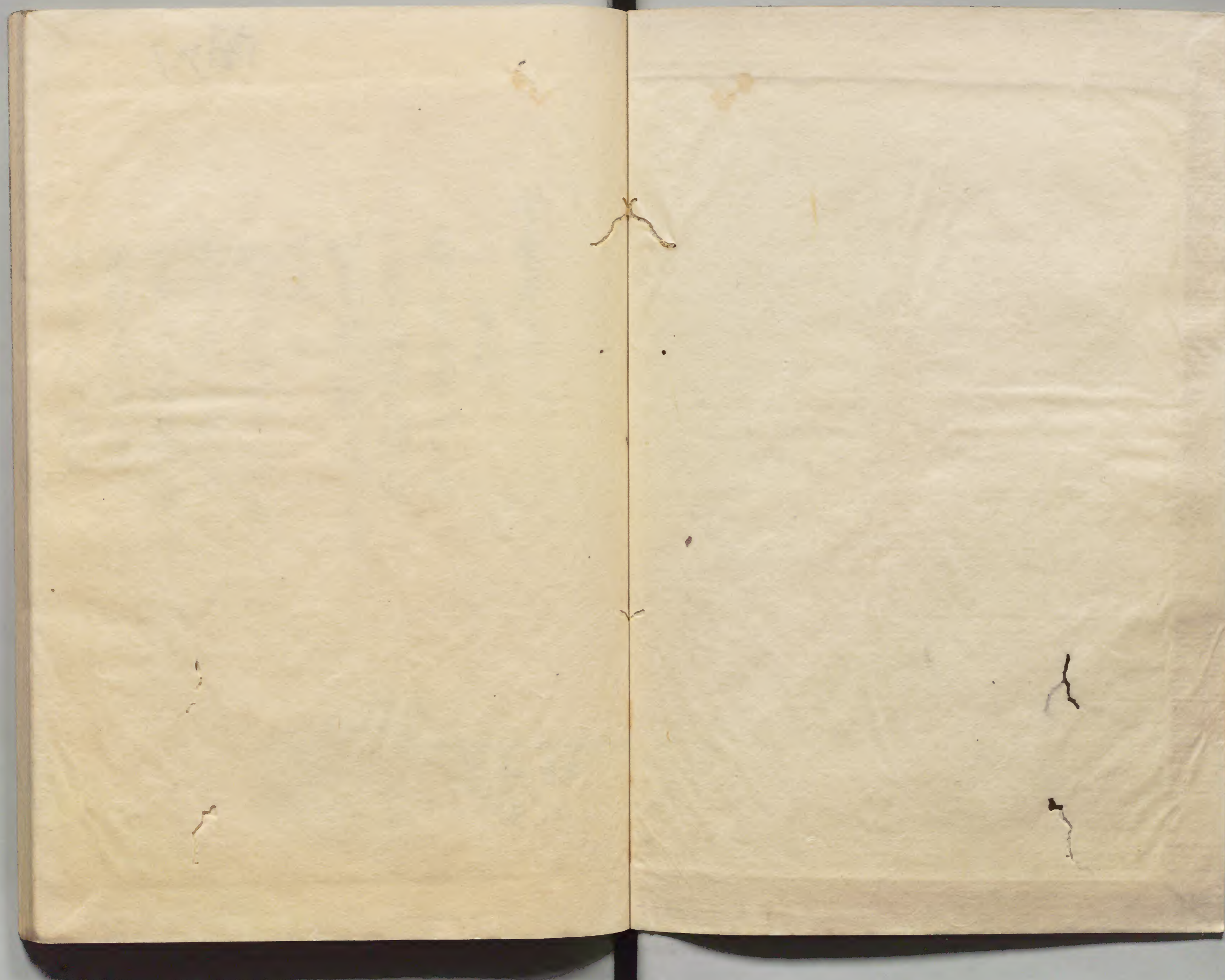
庫 文 閣 内		
四 九 函	三 五 七 五 冊	和 書 類
一 八 架	三 冊	五 號

内 閣 文 庫		
番 號	和	35755
冊 數		(3)
函 號	3	80



史
三
五





閣下



Handwritten text in vertical columns, including the characters '徳門' and '目録'.

細島
津川

水形唱書紙

吹上止吹流の名所也

神君御遷生日支千お苗の事候係

所持任所任候の澤



徳川家御軍器

守囊卷之下

徳川家御軍器

浄土文御幡一流

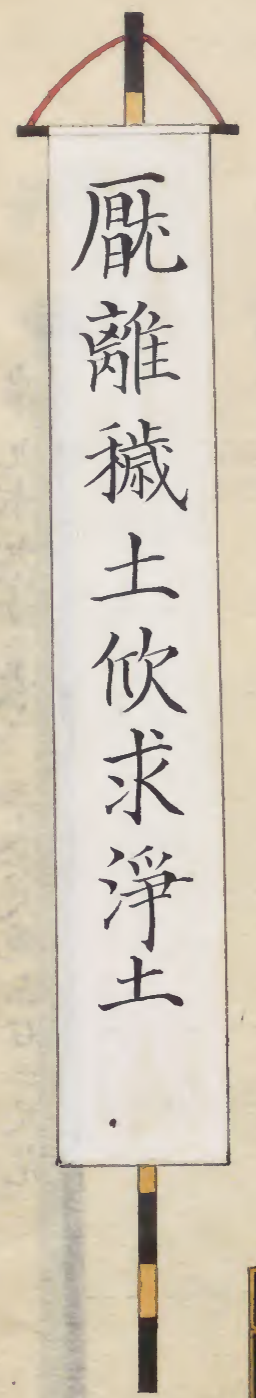
地白文字黒

此御幡日光
御宮三納之ト云々

御幡宮
黒漆塗



クワン
御致



厩離穢土欣求浄土

御幕西流之内

前 在 烈 陣

乳 上中下五十三世六廿八
廣六分長二寸八分
畀付一寸二分合四分又イメ叶



皆 者 鬪 兵 臨

御幕兩流之内 白地御紋黒

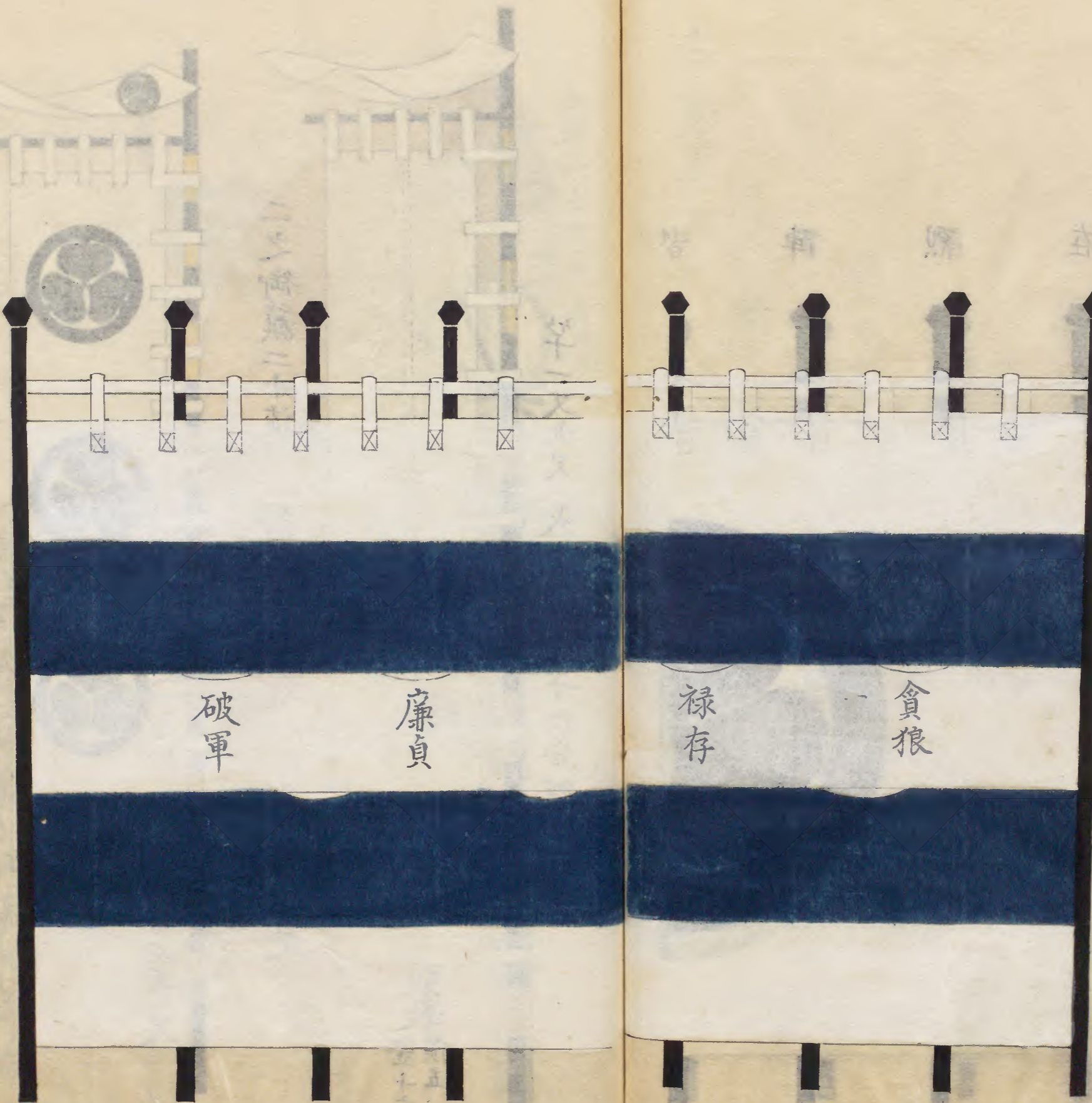
串九本九字ニ表ス 三丈六尺繩左右三尺宛



御幕兩流之内

御紋無白緋布交
白三段
緋二段

常八串八本 八大龍王表



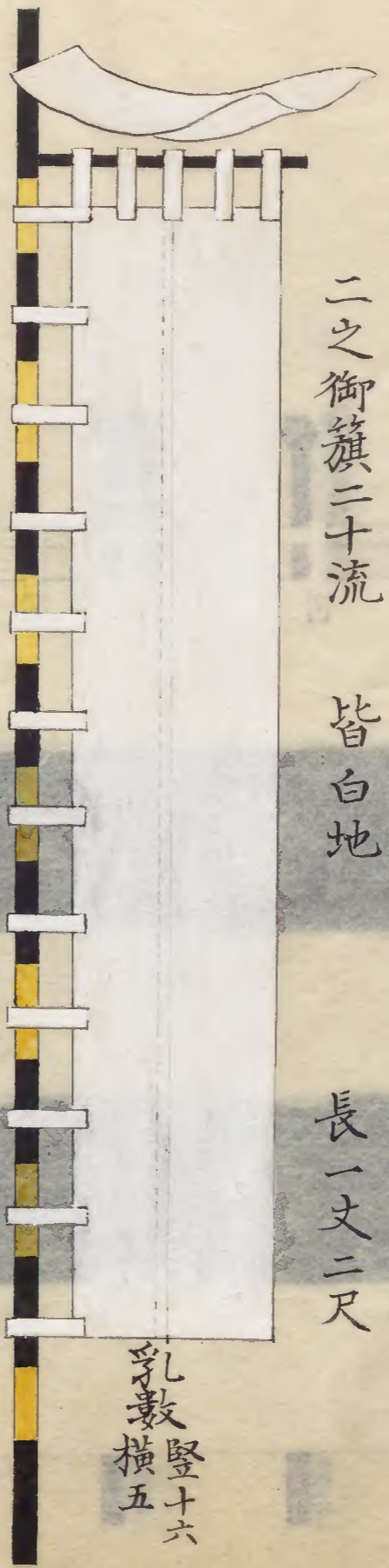
手繩金剛童子

串長十八尺宛



白地
御紋赤

竿一丈九尺 大目通四寸六分廻り



二之御旗二十流

皆白地

長一丈二尺

乳敷 横五 竖十六



一之御旗七流白地

御紋黒三ッ宛
吹流御紋一宛

長一丈

竿二丈二尺

御關船安宅丸百挺立
 天和元年御解船被仰付
 同大龍丸六十挺立
 享保十七年河野勘右衛門兼役
 之御解船被仰付
 同天地丸七十六挺立



並御船印

淺黃吹貫
 御紋赤

御船印
 白地四半



淺黃四半
 御紋赤



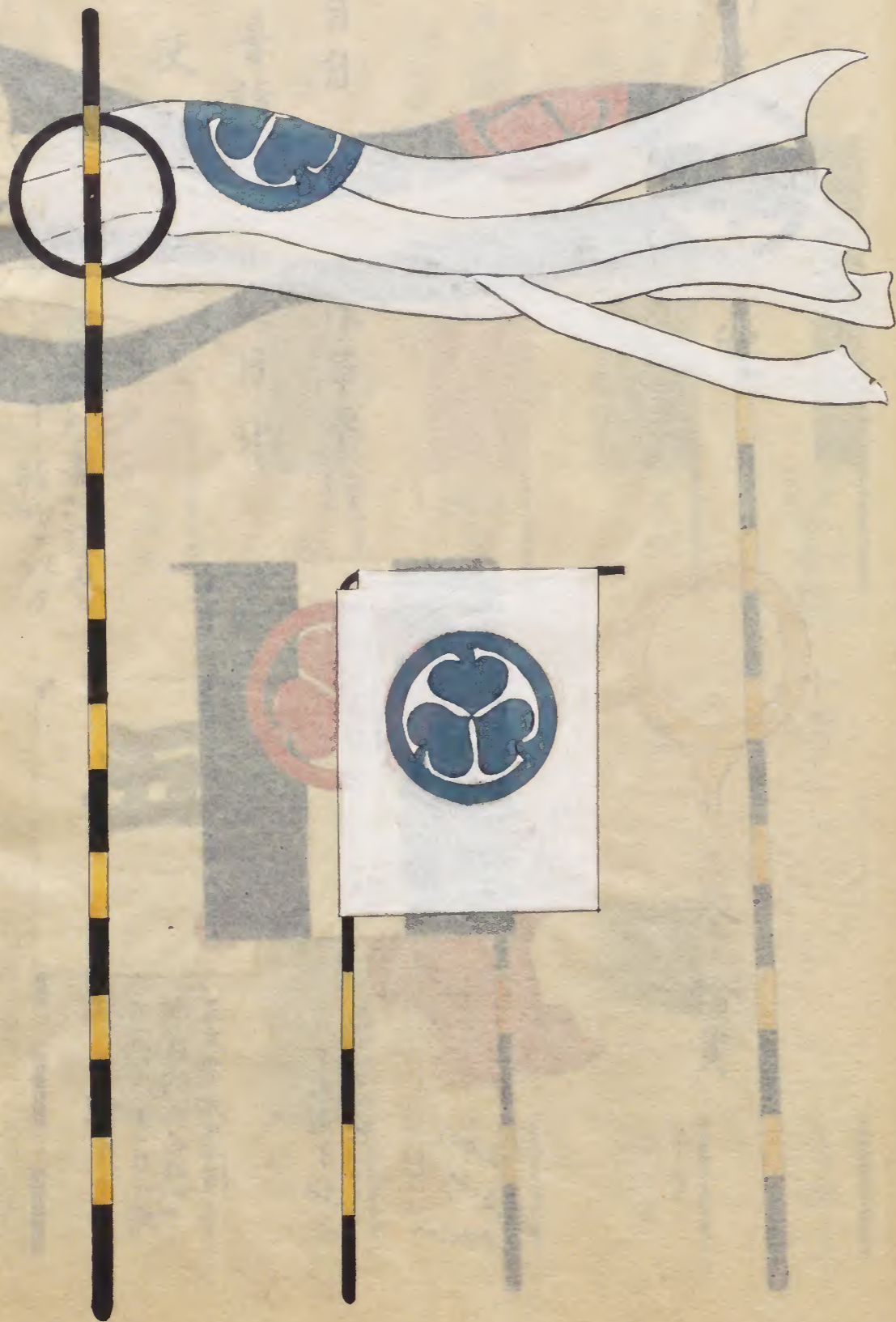
御座

御船印

御紋赤
 白地吹貫
 出金採



白地四半
 御紋赤



白地吹貫
御紋赤

並御船印

白地四半
御紋赤

御旗本惣印

大目舟

御作事奉行

御普請奉行

御使番

此五役者下ニ因スル外ノ赤地纒及ヒ
五文字ヲ顯シテ丸ノ四半ノ指物ヲ以テ
合印トス

赤地纒

金ノ輪貫

五

五文字大ニ不同
地龍門色各任心
五文字下ニ自分
或ハ色繪アリ

出シ串一尺三寸ヨリ
八寸位迄下倣之



或書
寬永九壬申年
諸番諸組ノ母衣
指物具足等御定

御小性組

切裂挽
出任心

御小性組番頭之始記
台苗御代大坂御陣以前慶長年中始而被
仰付始御花畑御番下六十人頭御徒頭亦
三役兼帶ト云

一番



赤地

二番



紫地

三番



白腰替
黒

四番



浅黄地

五番



紺腰替
赤

六番



白段
赤

七番



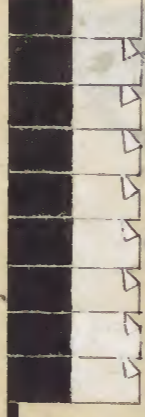
黒地

八番



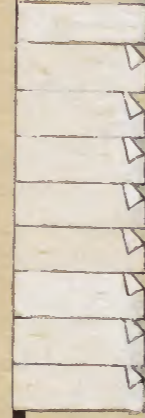
上下白
中黒

九番



白片身替
黒

十番



白地

御書院番

母衣
出任心

一番



黄

二番



紫

三番



浅黄

四番



地白
中黒

五番



黒

六番



白

七番



八番



紫
布交
浅黄

五番
享保九
辰十月
新組



右同断
新組



白地
頭黒



白

赤白
布交

六番



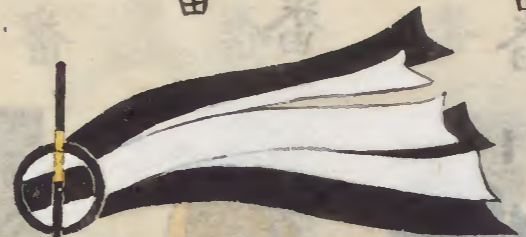
黒

上同断
新組



白色
花色
布交

三番



黑白
布交

一番



紅

四番



黄

二番



浅黄

九番



白地
赤乱
皇

新御
番

吹貫
出仕

十番

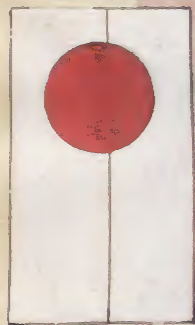


赤白
布交

兼應三
甲午年
指物五色
吹流三
定マ
ラル

或書
寛永二
癸未年
新御番
四組始
マ
被仰付
時斗間
御番ト
云
慶安元
戊子年
二組別
仰付
ラル

五番



朱白地
紋

三番



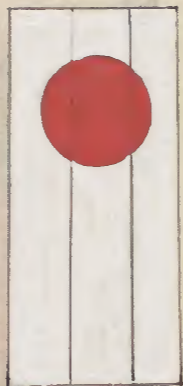
黑白地
紋

一番



白赤地
紋

十一番



朱白地
紋

小十人組

四半面々紋所
出無シ

御借具足皆朱其若石頭紺糸索掛緘兜雅形領
手蓋板脛衣猿頭頰前立輪貫袖臑當ナシ

六番



朱黒地
紋

四番



金淺黄地
紋

二番



金紺地
紋

十二番



黑白地
紋

九番



朱淺黄地
紋

七番



白赤地
紋

五番



金赤地
紋

三番



朱紺地
紋

一番



白黒地
紋

大御番

折掛四半
出無シ

十番



白紫地
紋

八番



金紫地
紋

六番



金淺黄地
紋

四番



金紺地
紋

二番



赤黒地
紋

十一番



相印横筋 笹縁同断

九番



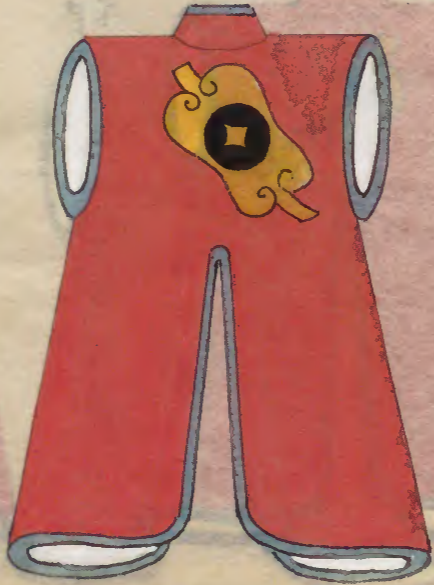
相印地紙 笹縁花色

十二番



相印瓢箪 笹縁同断

十番



相印九違角 笹縁同断

十一番



白紺地

九番



白黒地

七番



赤白布交
黒紋

御徒

御陣羽織猩々緋袖之黒花色ノ笹縁
金軍配團相印各紋如圖

十番



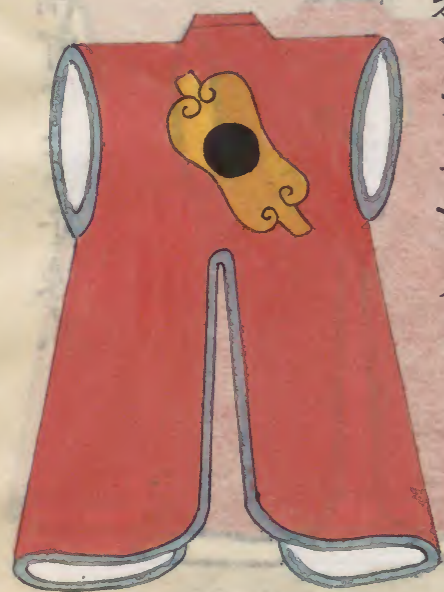
浅黄地
朱紋

八番



赤地
金紋

三番



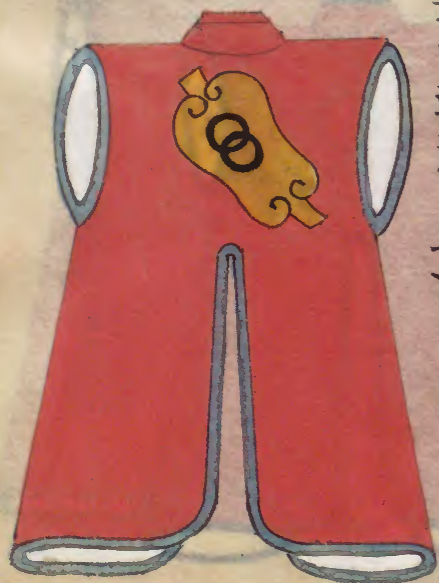
相印九笹緑花色

一番



相印九曜黒漆笹緑黒

四番



相印輪違 笹緑同断

二番



相印大之字 笹緑同断

十五番



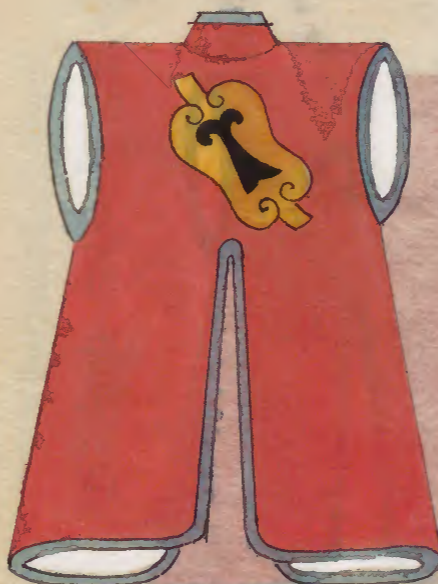
相印筋違笹緑同断

十三番



相印豎筋 笹緑黒

西九 一番



相印蕨手 笹緑花色

十四番



相印八文字 笹緑同断

右御軍器は寛文三年四月十三日御定有

四番



相印山之字笹縁同断

二番



相印山道笹縁同断

五番



相印鱗笹縁同断

三番



相印一之字笹縁黒

七番



相印チキリ笹縁同断

五番



相印一文字笹縁黒

八番



相印無地笹縁同断

六番



相印輪貫笹縁同断



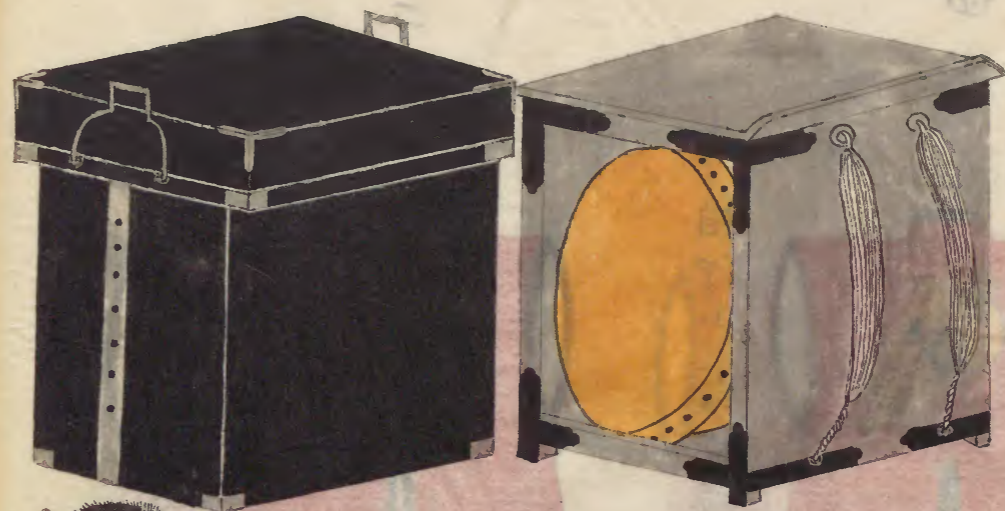
御貝役腰小篋

黄緒
合印赤

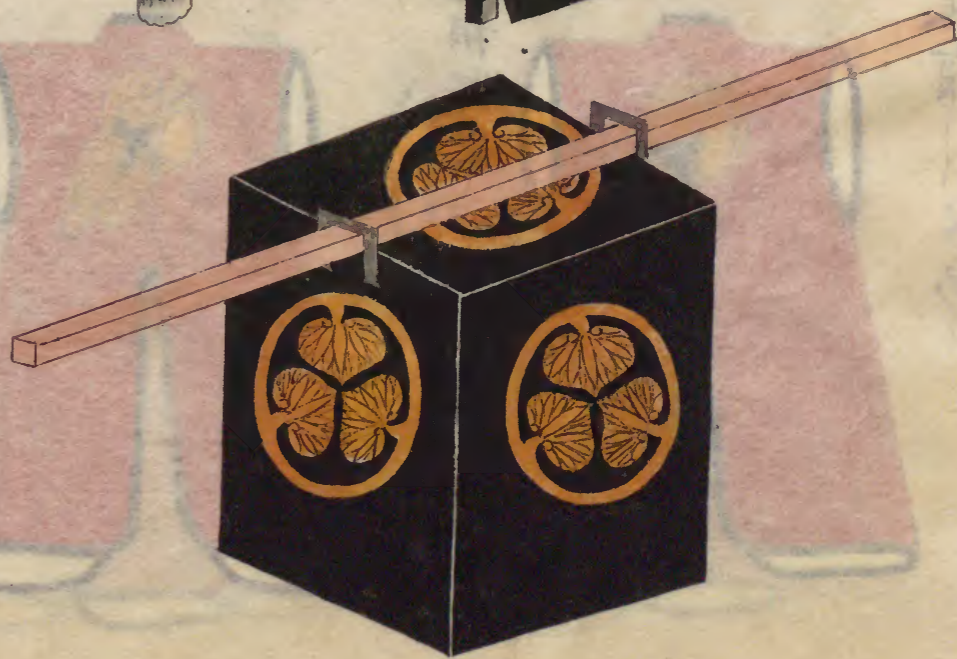
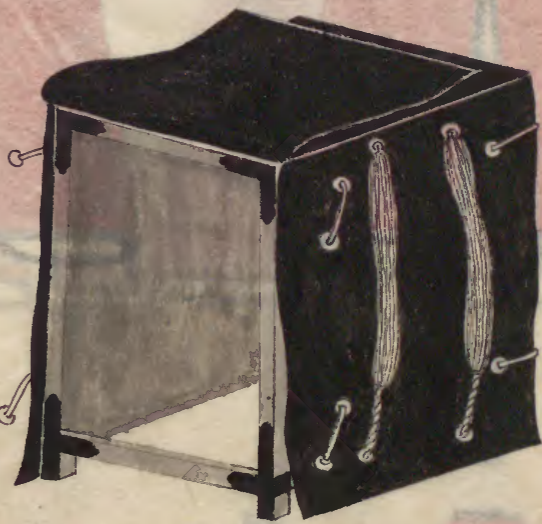


御太靴役腰小篋

空色緒
合印赤



御陳太靴之圖



古崎軍器司算入三年四月十三日

一ッ橋御館御陣太鞆ノ圖

道中金御紋舟黒鞆
 革履
 太鞆洞鍍包錆色腐カシ
 地紋雲龍洞ノ巾一尺
 革金濃縁通り黒塗
 差渡一尺三寸三ト
 鉄鍍座鉄物輪宝下座
 鍍紋紅ニタヌシ長二尺五寸ノ
 撥黒塗頭革包金濃
 長九尺ノ
 幕握々緋長七尺巾一尺
 一寸紐紫色長一尺五寸
 袋乳引通シ
 黒塗金物金減金高サ
 内法二尺上ノ方前後一尺
 七寸四分横一尺一寸五分
 下ノ方前後一尺九寸横
 一尺二寸五分



神君御影一軸

神君御影 尾州公御自筆此御影

源家正嫡 武門栋梁 興新田跡

出彦州郷 威風大振 德澤益彰

所向無敵 不招降降 有仁有智

克柔克剛 一統祖業 萬年永昌

此一軸是東部若川信通院長寄物也

室永八卯年二月水善清也其日年三月湖見水茶屋上唱了御覽
享保十三申年水竹隈之宮水庭廣了水泉水也其日西單院月
白死鳥舊古社御覽也其後付由禊也持地唐抄年

一清水壺寺額 享保七年四月掛加納遠江寺年

一河洲水泉水 水石二山坪 石石三坪水面 中島五十三坪余 水流中流砂利百三三坪

寛政十三年雪見形石地是庵古田御中寺殿上

一福神社

享保九年申年水善清也土石上三三石物見場初水御覽四年七月 水物見

一石馬場御了 上見所

室永之流極田御所引享保九年申年水庭河也其場長寺古御中 七百

一梅之水腰掛 方木之梅一切水有年享保三年申年也

一廣芝 寺方三子七百坪有年也其是也

一河島建 享保三年申年水善清也其日一棟也其日土也其御覽也

一本城山水流 享保二年四月申年

一田地千四百三坪御了 本 四股七畝余 田地水流享保三年申年也

一三角美末寺御見

享保六丑年閏七月申年水善清也其日一方也

懐信院極也初年之宮御覽也其三角之廿也

一西花檀水馬場帳 享保七年 享保七年新規也

一同上覽所 享保十九年申年水善清也其日一也 國中善收年

一河洲水 日二十卯年也

一鳩御腰掛 享保十五年申年水善清也其日十月鳩也

一 煉土脚腰掛 元文二年二月廿七日申幕河原藤原寺後果製

一 山崎水流 寛保三年山崎水植付成近高四年桃桂桃

一 新中茶屋

宝曆五年七月廿四日知事申覺親水親寛政七年掛籠腰掛事

一 河川泉石 六百七十坪餘

一 新中馬場 長百廿四尺百 宝曆七年七月廿七日

一 河上覽所 宝曆六年七月廿七日

一 煉土前水流 天明三年三月廿七日

一 新水流 日八申年二月廿七日

一 地至山下水流 寛政九年八月廿七日

一 田舎水茶屋 日七申年四月廿七日雪月廿六日新掛籠腰掛事

一 酒坊水腰掛

寛政八年六月廿七日新成事上申元石

一 赤腰掛系出石 寛政十年申建定高和二年九月廿七日

一 河川水別之池

一 河川水井筒 寛政十年申井筒八申成出内申事

一 河川水石

一 草草畑水腰掛 寛政七年申事

一 織殿

寛政七年八月新規出申織業之者申抱入河川橋渡御

一 小善清方水修造事定也

一 水名高下馬場 長九十四間 寛政四年七月廿七日

一 廣芝一書 寛政三亥年七月廿五日
 一 水摘草流 日下丑年再にお掛
 一 新出地多漏并地 寛政七年九月廿五日
 一 琉球地 寛政十二年九月廿五日
 一 大道廻水摘草摺地 享和元年六月廿五日
 右明上御役所 水記簿 ありしり

水船唄高組

皇帝 從 程 以 從 古 憲 壽 酒 以 從 確 以 從
 花 掬 廉 島 月 見 以 從 郊 傍 以 從 於 乃 以 從
 道 中 以 從 日 中 日 下 白 浪 世 行 三 石 道 以 從

土子の乃 さいもん 玉加川 包お三月 草此也
 秋の尻 唐の舟 水は此也 永く也 川を此
 舟は此也 和舟此酒 秋も此 吉野山道 以廣此月
 八百菊 一夜二歌 年の歌 悲ひ此也 富士此
 明石 玉此也 酒此也 七此多し 白也
 忠流 四季此也 賢人 光此也 河此也
 意田川道 水此也 如龍此也 名此也 空此也
 佐助此 名此也 長崎 此也 此也 此也
 法歌 此也 此也 此也 此也 此也
 ちも此 此也 此也 此也 此也
 八島此 此也 此也 此也 此也
 池田 水唄 歌 六十八番

吹上名初書

久政元年 古常あまを巡の國より名阿波松の苗城
由取家松を引しと一月末の言より吹上の吹上取
山吹流の端より種出を多し其松の名にて好写ぬ

高砂ノ松 此松は吹上にて好す 岸北松 吹上にて好す 大松

北ノ天神 和州之端松 徳見堂松 比叡松

三井寺 少松 加茂松 須磨松

明石 衣笠松 多羽松 清水

笠取山 龜山 宇治中倉松 新院

一洲松 二洲松 三洲松 四洲松

梅ノ宮松 今宮社松 常松山松 並園

吹上にて好す
吹上にて好す
吹上にて好す

右田澤の松
の街流

玉ノ井 桑屋松 河内宮城 和者ノ浦松

衣笠山 難波江松 金峯山松 薩長山松

栗田山松 園ノ松 市崎松 高松山松

伏見 数早切

神君 神徳寺 日ノ本 寺 吹上 寺 松

長治二年十二月廿五日書付

吹上

吹上松の御名代有之依之吹上寺にて好す
長治二年十二月廿五日書付

吹上寺にて好す

内方良と置りしその謂は如しねと云ふは
天皇御元服の時加冠せられたる御衣の
ゆへに神衣前子必大御衣を任さるる時
内方良も有し其を志はくく四つなり

右任御守りより以上

七月七日

仁國清卿

右祕書或人の言も借ぐ字めね松尾法卿の言有る
まゝ高江の事ありて職系功志の事あり

守書下之巻年

守書追加

神君園と京御陣の事

以て秋ははな言ふれはむといふは
けしや言はぬ事あるに因り

其は乃秋はは言ふれはむといふは
海に神のあり

神君いつは御陣は時うはむといふは
御衣の御衣を給ふ時

神君東鑑城御覽みく
名は御衣の御衣は除く
活字板御衣の御衣
假

あゝ存心なきふらふら細乞 子ぬらふ事と仕掛付さる

君は感嘆さるる 遷所也位持の如作流流の中終る

台徳院殿或時上意に想ふ侍の帝 二に此浮世遷流
中一の氣遠望院光二に地表雷鳴亦二に子終る二に上意
可事事なれはを対見形の如く終る事と兼て上意に
ともは作大ははるあなをくもれ 出言をまかす
又此上意の世人もあつたしとて浮世を為の世も一に是
なれば只一時も無くもくもの往來をよめあつたは備
なればたぬれぬし多終る情も一に終るをたもつたあとの

湯意守人を感しとあり

或時^年出登野子御殿行を由是明くある時御侍を御
させある現理より其物めし時を由是遠近を御後言上
其まよふ此の時斗ももつれと出んあくち上らも御對を
さるる世にあらはれ流しを先流人由物のはきもあつた
はるるよのあつたあつたをわけて流る湯意の別居をみるん
由あるはあはれ流るはる依く後を流るくもる御後言上
時分は中時斗をよめくもる善業しとあり

大敵流縁なきをたを御後言上をせむいなる運流由無り
もれ上城城波の音といふ流るよん一御後言上を
流る無あつたは御後言上御後言上といふもの御後言上

系よりみやく附通しといひしを賜へ

御破入の付ゆゑの上意を申し候

枝ありし松皮後み所へくと付たり候の件

御感あまじしと

大敵院御御院年にはは終ひの後はむらさくら

鏡のえおぬ菊に新あゆもと此姿をい川地はらむ

花のんやいふ歌をん

嗚は散られえまゝく嗚梅枝の道^{葉カ}も花は心あふらん

まゝこれ御海よ

氏おもひえそちあまを人えたり花をみり此月を料

根をなはらむとえいとし申しよ人のこゝろをれあふぬま

ふりあふ四首の御身とま中ま

又或年^上御院御院月日^上御院^上為御院御院にお申し時麻布白浪の

田畑に雁十羽斗群居をよめる竟々下りて終ひ山力と

走るものも尾を羽打新しぬあまを供^上に画^上をあま書と

感しとましとあま

又寛永十二年十二月江戸御院御院石垣貝附形^上再^上御院

由善清を治るく命をよは鞠町^上の^上見附^上松平長と

秀^上就^上北^上持^上陽^上也^上成^上時^上け^上り

大敵院御御院成^上其^上時^上秀^上就^上長^上益^上田^上御^上禮^上申^上善^上清^上也

まはありゆつ子竹杖と核^上の^上杖^上御^上目^上見^上上^上意^上御^上禮^上申^上書^上

の色紙^上御^上持^上の^上一^上葉^上御^上持^上申^上一^上御^上禮^上申^上と^上一^上御^上禮^上申^上候^上

付く横行をさし果てく浪の運をうらや

大猷院放逐徳の由

多と多しみ社れこを何し武蔵のまを隠せ花のあ
能人の隠せぬとと強を忍ぶと也抑を長下中言ひて
定らし一州時代の格之或時久世の言は不斗身あ
今能くもたうを物とて言はれはち言はれ
道らえ出たりのや上れを言は上意はれ何して運
此身あまを魂の何し法をのしと上れい何たり
上意は時懐中の言付を言出といふも何未は何也
と世代いのはしめあはれと

又久世唐之を 家綱の付をうらや

神清より上候の世田か言ふか
むと目あつてくか言ふ海つ知のあはれは
唐之の内は魂ひ言ふと言ふを唐之の言はれ
物とて言はれと也也中核論換し出ると也と知長
多と多しみ社れこを何し武蔵のまを隠せ花のあ
能人の隠せぬとと強を忍ぶと也抑を長下中言ひて
定らし一州時代の格之或時久世の言は不斗身あ
今能くもたうを物とて言はれはち言はれ
道らえ出たりのや上れを言は上意はれ何して運
此身あまを魂の何し法をのしと上れい何たり
上意は時懐中の言付を言出といふも何未は何也
と世代いのはしめあはれと

徳廟をさうりて日蓮を遠く流すの事或信日蓮の事とす
是を由信信用托せし事九月月日如部へ書移し托しとすむ

一木 控 六井 控

二火 控 七岩 控

三庭 土石部 八松 控

四竹 控 九菰 甲

五井 控 十葦 控

天正六年四月上旬江州安土の城をめぐり平信を酒宴
のあつらひに郭六の神書出待加稱ありて

啼きんをさるゝと仕舞ふとすむ 信長公

海軍守少我殿分の海とすむ 利家衛

鳴あはるゝありし事少郭六 秀吉公

ありきんははるゝと海軍時 神君

名おれは口ははらひ自然智仁勇自他往を成す事
面へ感しむもは行書成事とすむ

東照宮十三回御書ゆゑに御製

持らや一海の浪をわきまきくは行はく此代とすむ
郭六なるもそのとらうとすむ此法成るもとすむ

文政五年四月廿六日賜

大樹尊堂に延敷 高杉忠朝

みとりとふる十の春をいひまはるゝはの難とすむ
是書札の長徳田中納言の在田も無しとすむ八丈高の配流とすむ

後清水尾院 神 御製也

台徳元時代官の父高任等の為の事...
或時怪料種...
改子官事...
と...
内...
由...
代...
某...
因...
多...
多...
多...

持...
台...
上...
由...
ら...
上...
ら...

おるもの...
一

明治十一年四月以五弓久文蔵本謄寫

校讐



